

■平成 23 年度 第一期 (7/25~8/5) インターンシップ技術講習生のつぶやき

技術講習生のプロフィール	技術講習で体験したこと、感じたこと	今後の抱負など
<p>①窪田佑二 筑波大学 生命環境学群 3年</p> 	<ul style="list-style-type: none"> <li>前半は、地域活性化を図るための歴史的・地域資源のデータ入力とマッピング。資源の価値を住民に理解してもらえるように、分かり易く視覚化していく地道な作業の大切さを知った。</li> <li>後半は、地震で被災したため池堤体土の各種試験。作業に手間取り、考察までたどりつけずとても心残り。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>インターンシップで、人文科学的なアプローチと工学的な実験という異なる実務に関わることができ、非常に貴重な経験となった。</li> <li>農村地域には様々な問題があり、様々な要因が複雑に絡み合っている。幅広い分野から多面的に考察していけるように、一層勉学に励みたいと思う。</li> </ul>
<p>②坂井亮介 新潟大学 農学部 生産環境科学科 3年</p> 	<ul style="list-style-type: none"> <li>前半は、地域活性化を図るための歴史的・地域資源のデータ入力とマッピング。在来作物を継承していくには、研究、地域の組織、多数の理解と共感が必要と感じた。</li> <li>後半は、カンボジアの湛水域の面積と湛水量を求める作業に関わり、今後の力国の地域整備や防災計画に役立つという研究の出口を理解することができた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>様々な研究者や実習生と交流する中で、新たな発見や価値観を見つけることができ、充実した10日間だった。</li> <li>実習中に、研究職や行政職などの進路について職員の方々と具体的な話しを交わす機会があり、これを励みにして努力を継続していきたい。</li> </ul>
<p>③高橋幸平 新潟大学 農学部 生産環境科学科 3年</p> 	<ul style="list-style-type: none"> <li>前半は、麦栽培に関わる文献データのデジタル化とマッピング。後半は、地震で被災したため池堤体土の各種試験。</li> <li>研究を進めるステップとして膨大なデータ処理という工程があり、それは地味ながら、研究の質を決める重要な作業であることを学んだ。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>まだ大学の研究室に入っておらず、研究とは調査や実験から成果を生み出すという漠然としたイメージしかもっていなかった。また、研究者に必要なものは、難解な方程式を解く力や実験データの解析力かと思っていた。</li> <li>これらに加え、研究者には、地味な作業を続けることができる体力と精神力も必要であると確信した。</li> </ul>
<p>④熊谷祐里 岐阜大学 応用生物科学部 3年</p> 	<ul style="list-style-type: none"> <li>地震で被災したため池堤体土の各種試験。</li> <li>大学で土質基礎実験の授業を受けていたので、与えられた作業に対応できたが、手際が悪く、予定数量をこなすことができず、また、やり直しの実験もあり、技術の未熟さを痛感した。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>扱うサンプルは、ため池の被災の原因を突き止めるために採取されたものであり、作業の責任感を味わうことができた。</li> <li>夢中で取り組むことができた貴重な5日間(8/1~8/5)だった。</li> </ul>
<p>⑤木下 冴 宇都宮大学 農学部 農業環境工学科 3年</p> 	<ul style="list-style-type: none"> <li>水路に関わる現地調査、水理実験、解析、測量。</li> <li>JICAの海外研修生と合同で現地見学。</li> <li>用水路と排水路の区別もできないほど現場を知らなかったが、やがて目が肥えてきて、それまで気がつかなかったことや見落としていたことが見えてきた。現場経験を重ねることで、研究者の目は磨かれていくのだろう。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>現地調査等を通じて、知識を持っていなければ現場に出ても通用しないと感じ、大学の授業を大切に受けたい。知識修得もさることながら、実際に現場でどのようなことが起こっているのか、学んだことが何に活かされているのかを知る事が重要であることを学んだ。</li> <li>将来を見据えて、もっともっと多くのことに触れ、どんなことにも挑戦する心を大切にしようと考えている。</li> </ul>

<p>⑥桜井壮太 宇都宮大学 農学部 農業環境工学科 3年</p> 	<ul style="list-style-type: none"> <li>・水路実験、水路調査、水路系の施設調査。</li> <li>・取水堰では水を貯めて水位を上げることは知りつつも、貯められた水が水路を通じて、また、分水工によって、農地に運ばれるという役割を理解できていなかった。用排兼用水路や管水路の利用など、水路システム技術が農業を支えている現実を理解することができた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・農地整備や生態系保全など、農業と農村には様々な問題がある。でも、何よりも水路があって水が供給されなければ作物を育てることはできない。そして、公平な水分配には技術力が不可欠であると認識できた。</li> <li>・水路システムという技術を通して現場を見つめると、農業農村がこれまでとは違って見えるようになった。</li> </ul>
<p>⑦北瀬翔一 弘前大学 農学生命科学部 地域環境工学科 3年</p> 	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ふとん箆のせん断強度試験。</li> <li>・ふとん箆の製作を体験した。初めのうちは石をうまく詰めることができなかったが、徐々に要領を覚えた。</li> <li>・大型せん断試験機を使用して荷重と変位量の関係の計測するのに1ケース10時間かかった。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・大学では到底できない大型せん断試験機を使用した実験は、前例がないため、試行錯誤しながら実験を進めるというとても貴重な体験(8/3~8/11)になった。</li> <li>・お世話になった方々からいろいろなお話を聞くことができたことも、今後の自分の道を考える上でとてもためになった。</li> </ul>
<p>⑧新沼威宏 弘前大学 農学生命科学部 地域環境工学科 3年</p> 	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ふとん箆のせん断強度試験。</li> <li>・ふとん箆は根固めや土留めとしてよく利用されているが、せん断強度を調査した例は報告されていないという事実に驚いた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・今回の貴重な実験に関わることができ、本当に充実した実習期間(8/3~8/11)を過ごすことができた。</li> <li>・今後の専門分野の勉強において、この実習で得た知識や技術を大いに役立てたいと思う。</li> </ul>